様式第９号（第４条４関係）

論文審査結果報告書

論文提出者氏名　濱口　絢子

学位論文題目　成人における咬合接触面積、咀嚼能力と姿勢、性差および肥満との関係

審査委員（主査）鱒見　進一　印

（副査）川元　龍夫　印

（副査）細川　隆司　印

論文審査結果の要旨

本研究は、成人を対象に足底の接地の有無や体幹の傾斜と咬合接触面積および咀嚼能力との関連について評価したものである．

対象者は九州歯科大学の学生および大学院生 52 名（男性 28 名、女性 24 名）とし，咬合接触面積は T-scanⅢを用いて，また咀嚼能力は検査用グミゼリーを用いて嚥下までの咀嚼回数と咀嚼時間を測定している．被験位はいずれも座位とし，足底を接地した状態で床面に対して体幹を垂直に，眼耳平面を水平にした姿勢を基準位とし，不良姿勢を想定した他の３種の姿勢の４種を条件としている．基準位における咬合接触面積，嚥下までの咀嚼回数および咀嚼時間については各々の相関性，性別との関連性および肥満度との関連性を比較検討している．また４種類の姿勢での咬合接触面積または嚥下までの咀嚼回数および咀嚼時間の比較について検討を行っている．

その結果，性別での咬合接触面積は有意差が認められなかったが，嚥下までの咀嚼回数は男性が有意に少なく，咀嚼時間も男性の方が短かった．また肥満度別での咬合接触面積は有意差が認められなかったが，嚥下までの咀嚼回数は肥満群が標準体重群，低体重群より有意に少なく咀嚼時間も有意に短かったことから，肥満を改善する一つの方法として，咀嚼回数を多く咀嚼時間を長くするよう指導することが必要であると考察している．また，嚥下までの咀嚼回数と咀嚼時間の間には高い相関性が認められたが咬合接触面積と咀嚼回数，咬合接触面積と咀嚼時間の間には相関性は見られなかった．姿勢の変化に伴い，咬合接触面積は他の３種の姿勢で基準位より有意に減少し，嚥下までの咀嚼回数，咀嚼時間は有意に増加したとしている．

以上の結果より，嚥下までの咀嚼回数または咀嚼時間は性別および肥満度で相違があること，また不良姿勢が咬合接触面積，嚥下までの咀嚼回数，咀嚼時間に影響を及ぼすことが示唆されたと結論づけている。

本研究は，成人を対象に足底の接地の有無や体幹の傾斜と咬合接触面積および咀嚼能力との関連について検討した非常に有意義な論文である．公開審査における質疑応答も何ら問題は認められなかったことから，本審査委員会は学位論文として価値あるものと判断した．